

# 甲奴郷土史だより

第21号  
2021年5月

甲奴郷土史研究会発行

## 蘇民将来と厄除け

七月に京都で行われる祭りと言えば『祇園祭』である。このあまりにも有名な八坂神社の祭礼は、貞観十一年（八六九）全国に疫病が流行した時、平安京の広大な庭園であった神泉苑に当時の日本中の国の数と同じ六十六本の鉾を立て、祇園社（八坂神社の前身）の神を祀り、神輿を送って、災厄の除去を祈った祇園御霊会に始まる。

祇園祭に参加する氏子は【蘇民将来子孫也】の護符を身につける。これは、八坂神社のご祭神である素戔嗚尊が旅で難儀をした時の話によるもので、それは鎌倉時代中期、卜部兼方によって記された『釈日本紀』に、『備後国風土記逸文』として蘇民将来の説話が伝存されている。

『釈日本紀』とは、鎌倉中期に書かれた『日本書紀』の注釈書。二十八巻。略して『釈紀』ともいう。成立年は未詳であるが、兼方の父兼文が文永十一年（一二七四）～建治元年（一二七五）に前関白一条実経の『日本書紀』神代巻に関する質問に答えたことが文中にみえ、正安三年（一三〇一）転写の奥書があるので、その間に成立したものと考えられる。鎌倉時代の卜部家は古典研究を家学とし、『日本書紀』の講読を行っていたが、兼方は、平安時代初期以来『日本書紀』を講読してきた諸博士説と、卜部家の家学を集大成して本書を著わした。

全巻は、

巻一：「解題」

巻二：「注音」（難字句の音を記す）

巻三：「乱脱」（分注などの位置を正し、読み方を指示する）

巻四：「帝皇系図」

巻五～十五：「述義」（難語句の意味を諸書・諸説を引いて述べる）

巻十六～二十二：「秘訓」（秘伝的な古訓を記す）

巻二十三～二十八：「和歌」（『日本書紀』歌謡をあげ、解釈を記す）



◆釈日本紀 出典：日本の古本屋

の七部門から成り、「述義」が最も重要な部分である。注釈の態度は数多くの古書を引用する客観的なもので、室町時代に入って神道の家としての性格を強めた卜部家の家学への影響はあまり大きくないが、現在では散逸した古典が数多く引用されている点でかけ

がえない書であり、『丹後国風土記』『伊予国風土記』をはじめとする風土記の逸文は二十余种に及び、『大倭本紀』『上宮記』などの逸文を見ることが出来る。また卜部家は、平安時代初期以来朝廷で行われた『日本書紀』講読の記録である『日本紀私記』が多量に引用されているので、それ以前の『日本書紀』研究の状態を知る手がかりを与えてくれる。尊経閣文庫蔵本が最も信憑性の高い写本で複製版があり、翻刻本には『(新訂増補)国史大系』八に収められたものがある。(参考文献 国史大辞典)

本文は次の通り。

### 『釈日本紀』より「備後国風土記逸文」

備後国風土記曰 疫隅國社 昔 北海坐志武塔神 南海神之女子乎與波比爾出 座爾日暮 彼所將來二人在伎 兄蘇民將來 甚貧窮 弟將來富饒 屋倉一百在 伎 爰武塔神 借宿處 惜而不借 兄蘇民將來借奉 即以粟柄爲座 以 粟飯等饗奉 爰畢出坐 後爾經年 率八柱子還 來天詔久 我將來之爲報 答 汝子孫其家爾在哉止問給 蘇民將來答申久 己女子與斯婦侍 止申 即詔久 以茅輪 令着於腰上 隨詔令着 即夜爾 蘇民之女子一人乎置天 皆悉 許呂志 保呂保志天伎 即詔久 吾者 速須佐雄能神也 後世爾疫氣在者 汝蘇民 將來之子孫止云天 以茅輪着腰在人者 將免止詔伎 (釋日本紀卷七)

備後の国の風土記にはく、疫隈(えのくま)の国つ社。昔、北の海にいましし武塔(むたふ)の神、南の海の神の女子をよばひに出でまししに、日暮れぬ。その所に蘇民將來二人ありき。兄の蘇民將來は甚貧窮(いとまづ)しく、弟の將來は富饒みて、屋倉一百ありき。ここに、武塔の神、宿処を借りたまふに、惜しみて貸さず、兄の蘇民將來惜し奉りき。すなはち、粟柄をもちて座(みまし)となし、粟飯等をもちて饗(あ)へ奉りき。ここに畢(を)へて出でまる後に、年を経て八柱の子を率て還り来て詔りたまひしく、「我、奉りし報答(むくい)せむ。汝(いまし)が子孫(うみのこ)その家にありや」と問ひ給ひき。蘇民將來答へて申ししく、「己が女子と斯の婦と侍り」と申しき。即ち詔たまひしく、「茅の輪をもちて、腰の上に着けしめよ」とのりたまひき。詔の隨(まにま)に着けしむるに、即夜(そのよ)に蘇民の女子一人を置きて、皆悉に殺し滅ぼしてき。即ち詔りたまひしく、「吾は速須佐雄(はやすさのを)の神なり。後の世に疾気(えやみ)あらば、汝、蘇民將來の子孫と云ひて、茅の輪を以ちて腰に着けたる人は免れなむ」と詔りたまひき。(釈日本紀 卷の七)

要約は次の通りである。

その昔武塔の神が、南海への旅の途中に日が暮れた。そこに蘇民將來と巨旦將來の兄弟がおり、弟の巨旦將來は金持ちで、兄の蘇民將來は貧乏であった。武塔の神は巨旦將

来に一夜の宿を借りようとしたが断られ、蘇民将来は快く応じ、粟の飯を炊いてもてなした。

のちに武塔の神が来て、蘇民将来の家族に茅の輪を腰に付けさせ、そのほかの巨旦将来などすべてを皆殺しにした。そして生き残った者に次のように語った。『我はスサノオの神なり。後の予に疫気あれば、汝は【蘇民将来之子孫】と言って茅の輪を腰に付けよ。そうすれば疫気から免れるであろう。』

この逸文から「蘇民将来説」という説話になり、平安時代にまでさかのぼって【疫病除けの神】【福を招く神】として、各地でスサノオとのつながりで伝承、民間信仰の対象となっっている。

蘇民将来を厄除けの神として信仰しているのは、岩手県水沢市から長崎県壱岐の島までで、様々な厄除けの護符や木札、注連縄などが存在する。



◆全国の護符・注連縄

出典：とことん信州上田！、八坂神社、  
北岡神社、伊勢地方、妙楽寺

宮城県仙台の陸奥国分寺、山形県米沢の笹野観音、長野県上田の国分寺八日堂、埼玉県飯能の天王山竹寺、愛知県名古屋の洲崎神社、京都の八坂神社などから授与されるものがある。

八坂神社では、木製柱状護符のほかに「祇園祭の粽」と称する護符も頒布されている。これは身を清め、無病息災を祈ることに期源をもったものといわれ、古来より八坂神社の御守となっている。

この笹の葉に巻かれ、さらに藁の柄がつけられた粽は、長刀鉾（山車）から撒くため、長刀鉾の粽とも呼ばれているが、ここに【蘇民将来之子孫也】のお札が添えられている。札この粽を門口に吊るして厄難消除を祈願するのであるという。

また、伊勢地方では【蘇民将来之子孫家門】・【蘇民将来之子孫門】と書かれた札のつい



◆八坂神社 祇園祭の粽

出典：ameblo.jp

た注連飾りを正月に飾る。これも『備後国風土記逸文』から家の中に邪霊が入るのを防ぐ呪符の意味を持たせている。

近年では『笑福』と書かれた注連飾りもよく見かけられ、文字通り『笑う門には福来る』を連想させるものであり、これらは一年中飾っておかれ、毎年大晦日に新しいものと取り換えるといふ、南勢・志摩地域独特の風習だ。



もう一つ『備後国風土記逸文』に由来するものとして、民間行事としての大祓、夏越の祓の際に行く【茅の輪くぐり】がある。

大祓とは、記紀神話に見られる伊弉諾尊の禊祓を起源とし、宮中においても古くから行われてきた行事である。中世以降、各神社で年中行事の一つとして普及し、現在では多くの神社の恒例式となっている。年に二度行われ、六月の大祓を夏越の祓と呼ぶ。夏越の祓では多くの神社で【茅の輪くぐり】が行われる。これは武塔神の指示により、茅の輪を腰につけたところ災厄から免れたところによるもの。参道の鳥居や笹の葉を建てて注連縄を張った結界内に茅で編んだ直径数mほどの輪を建て、ここを氏子が正面から最初に左回り、次に右回りと八字を描いて計三回くぐることで、半年間に溜まった病と穢れを落とし、残りの半年を無事に過ごせることを願うという儀式である。かつては茅の輪の小さいものを腰につけたり、首にかけたりしたとされる。

令和二年に八坂神社では、世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症の収束を願って季節外れの三月初旬から、例外的に【茅の輪】が設置された。記録によると、これはかつてコレラが大流行した年の秋に設置された明治十年（一八七七）から実に一四三年ぶりのことだった。



◆京都 八坂神社 茅の輪くぐり

出典：ザ・京都



◆昨年の八坂神社 茅の輪くぐり

出典：婦人画報

三次市内では、三次町にある太歳神社で、毎年六月の最終土曜日に【輪くぐり祭】が行われ、多くの参拝者が訪れる。



◆三次町 太歳神社

出典：ameblo.jp



◆三次町 太歳神社

茅の輪くぐり看板

出典：ameblo.jp

福山市新市町戸手にある疫隈國社 素戔鳴神社は、『備後国風土記逸文』に記されている「疫隈の国社」に比定されている。

天武天皇の御代（六七三〜六八六）の創祀にして、醍醐天皇（八九七〜九三〇）に再建されたと伝えられる。明治の神仏分離以前は『早苗山天龍院天王坊』を神宮寺としていた。廃寺となった天王坊では、別当僧は還俗して神官となり、祭神は本来の素戔鳴尊に改め、素戔鳴神社に改称した。蘇民将来伝説が有名であり、茅の輪くぐり原点の地。旧暦の六月三十日（現在の八月八日）の夜【茅の輪くぐり大祓式】が行われている。拝殿の南側には蘇民神社があり、謂れを記した石碑がある。

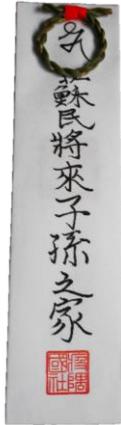
また、『延喜式神名帳』の深津郡一座の須佐能袁神社はこの神社のことであり、備後三祇園社の一社でもある。七月に行われる素戔鳴神社例大祭（祇園祭）は、備後地方の夏祭りの一つとして有名である。



上◆新市町 素戔鳴神社

中◆同 蘇民神社（左側）

下◆同 説明石碑

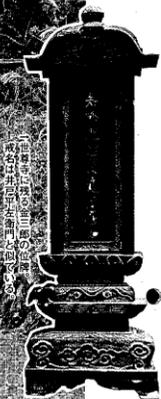


◆素戔鳴神社の御守



伊達金三郎の墓が建つ豊岡院世尊寺(庄原市高町)  
 ⑧は金三郎の墓が建つ世尊寺

# 東北 文学紀行



庄原市高町にある伊達金三郎の墓



庄原市高町にある伊達金三郎の墓

## 杉本苑子 「終焉」

—いも代官腹心  
伊達金三郎のこと—



金三郎の生家(伊達金三郎の生家)が建つ世尊寺(庄原市高町)の山頂にあり、今は霊園として使われている。

「伊達さん——たしか、伊達さんでしたね」  
いきなり井戸代官から声をかけられて、  
「は」  
金三郎は狼狽した。  
「さっきからふしぎに思っていたのだが、その、腰につけている袋は何ですか？」  
若さの気負いが、金三郎をたちまち、いったんの怯みから立ち直らせた。  
「薬草入れです。いまは犬ブナの皮がはいっています」  
挑みかかる語調で彼は言った。  
「飢饉はもはや避けられますまい。餓えのあとにくるものは、きまって悪疫の流行です。犬ブナの煮出し汁は下痢に効きますからね」  
「なるほど」  
なにか珍しいものを見るような、こまやかなまなざしで、金三郎のやや、眉のせまった意志的な風貌を井戸代官は凝視した。

これは女流歴史小説家 杉本苑子作「終焉」の一節である。  
 時は江戸時代の享保年間、石見国大森銀山(島根県大田市)を舞台に起きた事件を小説化したもので、井戸代官と伊達金三郎の運命的出会いの場面から、物語は2人を中心にドラマチックに展開してゆく。  
 井戸代官と井戸平左衛門は、領民を飢えから救うため、薩摩から甘藷(サツマイモ)を取り入れた「いも代官」として歴史に名を残した人物。そして、その種イモを実際に薩摩から持ち帰ったのは、三上郡高村(庄原市高町)出身の伊達金三郎であった。  
 今回はこの影の立役者、伊達金三郎を中心に小説の紹介をしたい。

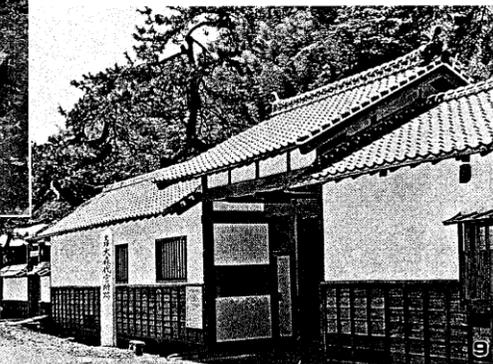
井戸平左衛門は江戸の人。永らくお上に仕えて、6歳になったのを機にお役御免の楽隠居を夢みていたが、それまでの実績が災いして、大岡越前守より大森代官の命遣が下る。老体に鞭打って赴いた石見の地は、相続凶作と前代官の悪政で領民は疲弊し、幕府の財政に大きな役割を果たしていた銀山もすでに斜陽化、一帯は殺伐とした風景が広がっていた。

平左衛門は何かこの窮極を打開しようと、私腹を肥やした豪商から金を引き出させ、貧者への救済に取り組むなど、特に民政に力を注いだ。前代官の悪政に反発していた手代の一人伊達金三郎は、新代官のこうした真摯な態度とすぐれた手腕に次第に態度を軟化「この人のためなら命を捨てても」とまでほれ込むようになった。また代官も、金三郎が暇をみれば薬草を摘む姿に共感し、何かと農政の相談をもちかけるようになった。

そして半年後、2人は偶然出会った薩摩の泰永という坊さんから「甘藷を作って民を救えよ」ともちかけられた。米なら年貢で取られるがイモならば——しかし、他藩の産物を持ち出すのは固くご法度、見つければ死を意



↑庄原市高町世尊寺にある伊達金三郎の墓。享年62歳。奇しくも井戸平左衛門と同年であった。



一小説の舞台となった大森銀山は今も至る所に歴史の跡が残っている。その一つ大森代官所。

で、掲載させていただく了承を受けた記事をご紹介します。  
 今回は上川に関する記事をご紹介します。  
 (株)青文社さんが発行されていた郷土誌「げいびグラフ」から、甲奴町関連の資料

郷土誌「げいびグラフ」から《ああ、懐かしの甲奴・・・》其の四

味する。代官は知恵を絞った末、金三郎と泰永の一行を薩摩へ送った。それから2カ月後、種イモを経文に見せかけ見事持ち帰ることに成功。早速石見の地へ植えられた。そうこうしている間に蝗(イナゴ)の大群で稲は全滅、代官は窮余の策として穀倉を農民のために開けた。

この年、西日本一帯はいわゆる享保17年の大蝗害で多くの餓死者を出したが、銀山領は代官の英断によって一人も犠牲者が出なかった。

しかし、代官は官庫開放の罪で、備中(岡山県)笠岡に送られ、お上の処断待たずして自害。後のことは伊達金三郎に託して、波乱の人生を終えるのだった――。

※  
以上が小説「終焉」のあらすじである。井戸平左衛門の生涯は史実と多少異なる点もあるが、領民のために甘藷を導入したことは事実で、後に「いも殿さん」「いも代官」と石見の人から親われ、明治12年には井戸神社が建立される。代官を神に祀る例は全国でも珍しく、200年を経た今も追善法要が営まれるなど、根強い人気を保っている。

さて、決死の覚悟で薩摩より種イモを持ち帰った伊達金三郎とはいかなる人物か、地元に残る史料から辿ってみよう。

伊達金三郎は、庄原市高町にある清永家5代井上与五

郎の子として生まれた。血気盛んな若者であったのを見込まれて、甲奴町有田の伊達伊兵衛の婿養子となり、伊達金三郎と名乗る。伊達家は代々有田鳥頭城の城主であった家柄で、当時は庄屋をつとめていたが、後、何かの功績があったためか、金三郎はお上に命ぜられ役人に昇格している。甲奴町有福にある西山寺(西照山法身院)の11代住職が書き記した「古今見聞鈍記」によると――

―当時の大旦那、有田鳥頭伊達金三郎殿は大公義(幕府)の御役人で、大名目附の御役人かには御在動中は、当山などの運宮所などのことも厳重に行われ、肩で風を切る威風盛んでまことに虎が山を走り、竜が雲を得たという様子であった――と金三郎を評している。その金三郎が大森銀山に手代役人(雑務に従事する役人)として赴くことになった訳は、元禄13年(1700)備後上下町一帯が大森銀山天領下にあり、享保2年(1717)には大森代官所の支配下に置かれるなど、この地域が大森とは行政上密接な関係にあったためである。

金三郎は井戸代官の元で領民救済に奔走し、甘藷の導入に尽力(小説ほど劇的ではなかったが)したが、この時、金三郎の植物の知識は大いに役立ったことは云うまでもない。常日頃から暇さえあれば菓草の採取に余念がなく、特に飢饉の後の疫病封じに貢献したことは、実録として知られる「徳川実紀」にも次の様に記されている。



一西山寺の11代住職良如上人の書き記した「古今見聞鈍記」。当時の出来事の中に伊達金三郎のことが数ページに亘って記されている。



一金三郎の養家伊達家は現在甲奴町福田で酒屋を営む。大と巨書をしてきた伊達多佳代さん(85)が亡夫から聞いた金三郎殿は「小柄で律儀な人」とか。

上下町有福の山にある西山寺。山門から山の頂までの位置が見える。

享保18年4月22日。石見国備後備中の代官井戸平左衛門正明(まさあきら)が属吏伊達金三郎 郡民の痼病に熟知せしものとてあらたに召し出され、正明が指揮にまかせ飢民賑救の事つかうまつるべしと命ぜられ徳目付の格にせらる(有徳院御実記)

さらに小説「終焉」の最後は次の様に結ばれている。――井戸平左衛門の役後まもなく、大森代官所属吏伊達金三郎は、菓草の配布その他、領民への日ごろの働きが江戸表へ聞こえ、手代役から一躍、五十石を加増されて徒目付に昇った。この措置は、生前、くり返し私信の中で、金三郎の手腕、人柄を賞揚し、「いづれ、しかるべくお許りいただきたい」と申し入れてきていた平左衛門へ、大岡忠相が贈ったせめてものはなむけだったのである。

金三郎が石見へ運んだ薩摩芋は、のち西国一円にひろく分布し、窮民を餓死から守ったが、甘藷先生青木昆陽の試植に先立つこと、三年であった――

その後、金三郎は一説によると訴訟ざたに巻き込まれて失脚、九州地方を流浪したともいわれるが、晩年は庄原市の生家までひっそりと暮らしていた。明和4年(1767)62歳で病死。奇しくも敬慕してやまなかった平左衛門と没年が同じで、しかも戒名まで平左衛門「良忠居士」、金三郎「道忠居士」と似通っているのは興味深い。

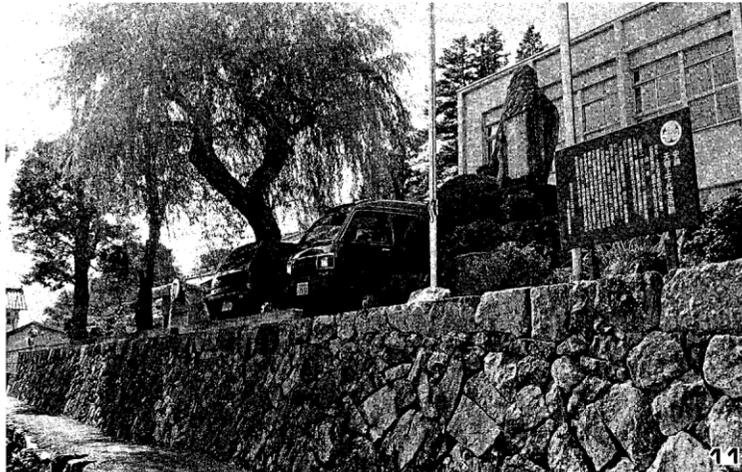
※  
この小説は以前「江戸から来た人」という題で、昭和37年別冊サンデー毎日新春号に発表された。杉本苑子が吉川英治に師事して10年間、一切作品の発表は控えてい

たが、その沈黙を破って一揮に作品を世に送り出し始めた頃の作品で、杉本苑子37歳の時である。この年、吉川英治死去。1カ月後に「孤愁の岸」を発表し、第48回直木賞を受賞、以後本格的歴史小説を発表し続けている。杉本苑子の作品の大半は史実に基づいた素材を巧みに処理し、資料の行間を空想力で埋めてゆくという方法で、歴史上の人物の側面にスポットを当て、違った観点から人物像を描くのを特徴としている。

「江戸から来た人」は、原稿用紙40~50枚の短篇で、銀山領支配の実態にもほとんど触れない内容であったため、その後、自ら銀山に赴いて資料を集め、300枚程度の中篇に書き改めて「遙かなり江戸」と題して小説サンデー毎日に掲載、さらに「終焉」と改題して、昭和52年毎日新聞社より単行本として発行された。



↑養家のあった甲奴町有田にも金三郎の墓がある。横は養父19代伊達伊兵衛とその妻の墓。



大森代官所の出張陣屋があった上下町登壇。当時を偲ばせる老松は朽ち、今は石垣だけが名残りをとどめている。

## 甲奴の石造物紀行 Ⅱ 梶田・戸下Ⅱ



石造物というと、宝篋印塔・五輪塔などたくさん種類があり、町内にも多くの石造物があります。寺社仏閣などにあり、目につきやすい石造物もあれば、道端にひっそりとある石造物もあります。そのような石造物にスポットを当ててみようと思います。今回は、梶田・戸下にある【牛馬供養塔】をご紹介します。牛馬供養塔の多くは道標を兼ねていますが、戸下にある牛馬供養塔は道標を兼ねていません。

旧大歳神社北側

の急坂部、大正十

一年（一九二二）

大正七年（一九一

八）施主、交通の

難所で牛、馬が下

の戸下川へ落ちて

死んだ為の供養塔。

二つの供養塔に

は、それぞれ仏様

が彫ってあり、ま

るで寄り添うよう

に並べてある姿に

亡くした牛・馬への愛情が感じられる石造物です。しかし拝む人もいないのか、周りは草が生い茂り、供養塔にも蔓が巻き付いている現状に寂しさを感じました。

他にも草むらのなかにぼつんとおられる馬頭観音のように、身近にあっても気が付いていない石造物を、これからも少しずつ見つけていこうと思っています。



### 〈事務局より〉

- ・会員募集中です。ご紹介ください。
- ・会の運営や研修内容について、ご意見やご質問何でも結構ですのでお聞かせください。
- ・「甲奴郷土史だより」にどんなことでも良いから、ご寄稿ください。
- ・古い写真や資料等を「甲奴郷土史だより」へ掲載していきます。
- ・出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先 鶴本 節子(カーターセンター)

〇八四七―六七―三五三五

